

とか輪廻などの不合理なものはこの思想の中には本来含まれていないとして両者を峻別し、両方を一語にして説明している木村氏の縁起の解釈を誤ったものとして、きびしく批判する。しかし公平に原始経典を読んで見れば、縁起が業の理論を述べたものであることはどうしても否定し得ないようである。そして業の理論であれば、当時の思想状況からして当然に輪廻と結びつく。むしろ輪廻や業などの不合理なものを含むところに、宗教としての原始仏教の生命があるのであるまいか。

余分な私見を加えて汗顔の至りであるが、木村博士の学説は今日再評価さるべきであるということ強調して、拙文を結びたい。(大法輪閣刊)

勝 呂 信 静

社会科学と現代仏教

孝 橋 正 一 著

△仏教△は△近代△のもつ問題性の総体のなかに投げつけられ、そこを通過することができなかつた。それは歴史

の宿命として甘受せねばならないであろうが、しかし今後も△仏教△に対する△近代△からの問いかけはつゞいていくであろうし、それに応えられないかぎり時代から葬り去られていく以外にみちはない。

しかも新たな問題状況として△近代△の自己否定△という難問をひきうけねばならないのである。現代におけるこの二重の問題状況をとらえることができないならば、△仏教△からの未来に対する発言はもちろんのこと、今日的な問題への解答を生みだすこともできない。残念ながら教団仏教を含むその周辺の△仏教△の現状は、現代に迫る手だてをもちあわせていないようである。思想的な作業においても、幻の古典的△近代△との格闘に精魂をかたむけている場合もあるし、△近代△の自己否定△という状況認識をあまり、中世的△非合理△主義に自己を埋没させてしまう場合もある。一般に△近代△否定△の媒介的な役割としての△中世△への問題関心は極めて強いが、それは少なくとも△中世△への埋没を意味しないし、中世仏教イデオロギーの擁護とも連なるものではない。また一方には日本的パーソナリティともいうべきヨーロッパ学信仰があり、△近代主義△の無媒介的受容とその正当化意識を生みだしている。現代仏教に即していえば、それは△近代化△認識

や「合理主義」による禿鷹へとつながるものであろう。その延長線上に「科学」との折衷による中世イデオロギーの自己合理化の思想や、社会主義コンプレックスから生まれる「隷属的政治主義」が生まれるのである。

本書の著者孝橋正一氏は竜谷大学で教鞭をとっており、「社会事業理論」を専門とする学者であるらしい。一九一二年の生まれであるから、すでに六十才に近い真摯なる学究であることが推察される。

本書は大きくは二つのテーマに分けられている。ひとつは第一章から第五章までの、宗教と社会主義、及び仏教とマルクス主義の思想的なかわりを追求したものであり、後半の第六章から第八章にかけては、仏教社会事業の理論的あるいは理念的の研究の諸論である。

孝橋氏は、永い間マルクスの哲学に対して強い問題関心を持ちつづけてきたようである。マルクスによるキリスト教批判を媒介しながら仏教とマルクス主義についての思索がここにはあとづけられている。

氏はキリスト教社会主義思想や、仏教社会主義思想の諸思想家をとりあげながら氏自身の思想として「仏教社会主義」の理念を求めているようである。そしてマルクス主義哲学と仏教思想との並立、交流を願望していることは、一

貫した氏の姿勢であるといえよう。そのことを氏自身の言葉でいえば、「わたしにとって、社会科学と仏教とは、けっしてとけあわない二つの別個のものではなく、二つであって一、一であって二として、なんとなく体のなかにしみこみ、とけこんでくるのをおぼえた」ということである。

私は、このように「社会科学」や「マルクス主義哲学」、に強い問題関心を持ちつづけてきた孝橋氏が、現代の社会的矛盾を自己の「実存」に耐えがたくひきうけているヒューマニストであろうことを疑うものではない。しかし、氏が自から指摘しているように、「宗教学者や仏教家は、社会科学をほとんど理解しないままできて、しばしば社会問題を語り、社会主義やときには社会事業に対してさえ、あらゆる非難をなげかける場面にであうことが多い」のであるが、氏の社会主義、及びマルクス主義哲学への「理解」はこれで充分現代的テーマたりうるのであろうか。例えば反体制運動の体制内在化という極めて今日的な社会主義の問題について、どういう解答をこの「理解」から導きだせるのであろうか。そして何よりも「仏教」と「社会科学」あるいは「マルクス主義哲学」とのかかわりを、柳田謙十郎と同じような並列的關係（非歴史的思惟）で氏自身がとらえているのではないかとあやぶまれる。いふなれば「仏

教∨からのこのような求愛を受けた∧社会科学∨の方こそ一体どうしてよいのか困惑するであろう。そのかぎりでは孝橋氏も柳田も∧仏教的∨な思维に忠実ではあると思うのだが——このような社会主義への姿勢は、仏教者のなかに少なくない。∧進歩的∨とか、批難をこめて∧アカ∨とかと呼ばれる仏教者であっても、社会主義やマルクス主義への認識は、このような素朴なヒューマニズムや善意にもとづいている場合が多いのである。保守的教団にあっては、このような素朴なヒューニズムでさえ呼吸困難なのが現状である。相対的な意味で孝橋氏のような、まじめな研究者・思想家は貴重である。しかし現代的な問題を追求していくうえで、そのような配慮によって思想上の問題に手ごころを加えるわけにはいかない。特に戦後民主主義理念の崩壊という極めて現実的な問題が提起されている今日、孝橋氏の思想は本人の意図とは別に、批判的存在としての意味を失い先進的仏教思想の体制内在化を支える具体的な例として批難される場合もあろう。

日本的∧転向∨の論理も、実は左右踏みかえの論理にすぎない。柳田的転向も戦前の弾圧時代の∧転向∨も論理構造としては同質のものである。孝橋氏流に言えば∧一にして二、二にして一∨というまことに明快な論理である。親

鸞にせよ日蓮にせよ、日本仏教の論理は∧踏みかえ∨不能な位置を求めたものであって、孝橋氏のような∧対決∨と∧緊張∨関係を回避することによって癒着を恣向するものではないと思う。氏は∧仏教者のマルクス主義観——その批判と自己批判∨の章のなかで、稲垣最三・阿部正雄・戸頃重基・西谷啓治の諸説を解説しているが、そのなかで戸頃重基の思想にもっとも密着しているようである。その思想性のもっとも脆弱なところは、現実認識の手段としてマルクス主義を援用することにより仏教自身の方法論を発展させる努力を回避していることである。価値意識をマルクス主義におき、マルクス主義によって仏教を裁く立場にたつかぎり、自己展開は不可能である。例えばそのような考え方は、逆に「フォイエルバッハの神学批判と人間学的宗教」「マルクス主義の宗教批判とキリスト教・仏教」の章にみられるように、キリスト教と仏教はちがう——従ってヨーロッパ唯物論の宗教批判は仏教とはすれちがいに異なる。だから仏教とヨーロッパ唯物論とは場合によっては平和共存できるのだという、まことに通俗な問題意識に合流してしまふのである。マルクス主義の思想家に同情を乞うような、このような思想を、日本の仏教思想家のなかに多くみることは残念である。筆者はマルクス主義を仏教によ

って否定するとか、たたかわしめるためにさういうのではない。マルクス主義コンプレックスが心情的にみとめられるだけでなく、その心情が氏の思想に多くの影響をあたえていることをそこに見、それはマルクス主義の理解をはばむものとなるだろうと思うからである。同時にそれは仏教の現代における理解・批判・展開というわれわれの負うている課題を、あらぬ方向へそらしてしまうことになるであろうと思うからである。

仏教とマルクス主義、あるいは現代の諸思想との関係を考える場合、われわれはまだその方法をみいだしてはいないというのが現実である。ある意味では通路はふさがれたままになっているのである。それは、仏教そのものをわれわれがとらえきつていないからなのであって、民族音楽と洋楽の双方を、合奏できぬまま、自己分裂的に弾きわけていくようなものである。そのまことに困難な課題に対して、孝橋氏がとり組んできたことは壮とすべきである。しかし、「社会科学と現代仏教」という書名が示しているものの現代的な内容は、文学面ほどに明確に対象化することはできない。この∧と∨はわれわれもまた課題として負うている問題なのである。

大学人である孝橋氏は、筆者がこの拙文を記している頃

現代のマルクス主義について多くの問題を考えなくてはならない状況下にあることと思う。それはヒューマニストとしての氏の心情を強くゆさぶるものであるはずである。

「人間だけがもつ言葉と文章が、いかに美しく有用なものであるかを知ったが、また同時に知識と論理だけの回転が残していく軌跡が、なぎさの足跡のように、いかに空しく消えていくかをも、しみじみと感じないではおれなかつた。」という「あとがき」の文章に、氏が純粹な心情で学問と思想を索めてきた方であろうと人柄が偲ばれたのである。であればこそ、現代の極めて痛ましい時代思想の状況を鋭敏に受けとめることができるはずである。この現代のなかに仏教を求めることは、マルクス主義自体が遭遇している状況を理解することと無関係ではありえない。ただその関係は仏教の自立した理念の確立が裏づけられねば不能である。自立はただ独居の机上で思索し研究することによってではなく、∧実践∨的な課題を同時に課さねばならないはずである。日本の大学人は、きわめて実践的な思索を今迫られているといえよう。午、ごろりと横になるも可、夜、酔して地に伏すも可、すべて∧実践∨的ではあると思うのである。いやそのことを実践の課題としてやらねばならないのである。(創文社刊)

丸山照雄